

# 岩谷堂焼

*Iwayado ware*



えさし郷土文化館  
Esashi Native District Cultural Museum

#### 【凡例】

- 1 本書は令和2年10月17日（土）～11月29日（日）まで、えさし郷土文化館において開催のテーマ展「岩谷堂焼」の図録である。
- 2 本書は展示資料全てを収録したものではない。
- 3 企画・展示、本書掲載資料の写真撮影および執筆編集は、えさし郷土文化館の野坂晃平が担当した。
- 4 資料提供者および協力者名はp 19の「謝意」に記した。

## ごあいさつ

私たちの毎日の生活において、食器ほか様々な用途に用いる焼きもの、即ち陶磁器類は欠かせない存在です。

日本では、今から1万年以上前の縄文時代に始まった焼きものの歴史は、古代になると中国大陸や朝鮮半島からの影響を受け飛躍的に発展します。

奥州市では、平安時代の朝廷が、現在の水沢佐倉河に建設した鎮守府胆沢城や周辺の役所へ瓦や須恵器を供給する「国立の窯場」というべき数百基におよぶ登窯を江刺稲瀬の瀬谷子に建設しました。ここで焼かれた須恵器は陸奥国府多賀城が所在する宮城県多賀城市の山王遺跡からも出土しています。また、奥州市内にほかにも所在する平安時代の窯跡はいずれも蝦夷政策の一環として設置されたものと思われ、旧江刺郡の所在する北上川河東の地は良質な粘土の産地であったことがその理由でしょう。

江戸時代になると藩主や邑主などの武士や、富豪層である商人たちが、藩の経済政策や個人的な趣味嗜好から、有名な焼もの産地より職人を招聘して各地に窯を築き、焼きもの生産を行いました。しかし、これら民窯の多くは小規模であり、短期間で操業を終えてしまいましたが、中には久慈市小久慈焼、花巻市台焼のように現在も盛んに生産している窯も存在します。これらの地場産品の歴史を学び、それらを利用していくことがこれからも求められているといえそうです。

本展は江刺岩谷堂に江戸時代と明治時代に焼きものの窯が存在したこと、即ち陶器の生産が行われていたことを広く紹介する目的で企画しました。これら民窯の存在を通じて故郷の先人の努力を偲びたいと思います。

開催にあたっては、資料所有者はじめ関係者の方々より多大なるご協力を賜りましたことに深甚の謝意を表しまして、ごあいさつといたします。

令和2年10月17日

えさし郷土文化館  
Esashi Native District Cultural Museum

館長 相原康二

## 東北地方の窯場成立とその諸相

北上川の段丘地には、古くから良質粘土が産出していた。特に古代の須恵窯や瓦窯跡群は、北東北経営の拠点となっていた城柵・官衙に付随していた。この時期に江刺稲瀬の瀬谷子窯跡群が操業し、現在の稲瀬鶴羽衣台から同瀬谷子にかけて造営された登窯で生産された須恵器や瓦が胆沢城に供給されていた。また、集落においても水沢姉帯の林前南館遺跡の竪穴建物（竪穴住居）跡の中心にロクロ板を据えた小穴が発見されるなど、生産遺構の広がり確認されている。

その後、中世まで瓷器系窯（釉薬を施した陶器の生産窯）の構築は関東以南の大窯（六古窯等）からの供給が主流化するが、平泉藤原氏は東海の渥美焼に酷似した陶器を石巻の水沼窯跡と平泉花立窯跡で、さらに能登の珠洲焼に似た陶器を能代のエヒバチ長根窯跡で、12世紀に限定して生産していたことが判明しており、平泉藤原氏が奥羽両国において陶器産業を興そうとしていたことが示唆される。

中世以降は木製の桶類が容器の方途として多用されたことから、関東以北での陶器類は15～17世紀初頭までは大成していない。東北地方では、米沢の戸長里窯跡が近世初頭の茶陶の製作に関わったとされ、会津と相馬では17世紀から陶窯の創設が本格化する。

正保年間（1644～47）には瀬戸の陶工、水野源左衛門と弟の長兵衛が会津の岩瀬郡長沼に窯を築き操業を始めた。会津藩主、保科正之は正保2年（1645）に源左衛門を招き、大沼郡本郷村に開窯させて三人扶持を与えたという。源左衛門の没後は長兵衛が招聘され、のちに藩主から瀬戸右衛門の名を賜り、会津藩の御用窯として、茶碗・水指・花生などを生産。また、御用器以外の製品はある程度自由に処分することも許されており、日用品としての甕・壺・徳利・播鉢・片口などが一般に粗物として供給されていたという。

相馬の田代源吾右衛門は正保年間に京へ上り、丹波焼の次右衛門（のちの野々村仁清）の下で修業し、師から「清」の一字を贈られて清治右衛門と名乗り、帰郷してから相馬中村に窯を築いた。慶安4年（1651）頃、仁清風の茶碗を焼き始めたが、その後は独自の相馬駒焼の生産を開始した。また、元禄3年（1690）頃、相馬中村藩士の半谷休閑が双葉郡大堀村で陶土を発見し、雇人の佐馬に製陶技術を習得させて開窯。大堀焼の基礎を築いたという。以後、相馬駒焼が藩主相馬氏への献上品とされたのに対して、大堀焼は大衆向けの茶碗や土瓶などを供給し、民窯として発展していった。

仙台堤で焼かれた堤焼は仙台藩主、伊達綱村が元禄7年（1694）に江戸今戸の陶工、上村万右衛門を仙台に招き開窯したという。

万右衛門の没後は一時衰退するが、宝永年間（1751～64）に遠江国から来た菅原善右衛門が再興し日用雑器を供給した。堤焼の特徴は野趣溢れる釉薬にあり、特に白黒の海鼠釉を同時に掛け流すことで、濃淡の斑を発色させ器面に斑紋・流紋を生じさせる堤焼独自の特色がみられる。

鶴岡の大宝寺窯で焼かれた大宝寺焼は、文政8年（1825）の焼物に関する文書が旧窯元家に残されており、その頃の開窯とみられる。窯場は大宝寺町と新町の2ヶ所にあり、新町焼とも呼ばれた。近郊から得られる粘土を使い、厚手で重いつくりのものが多く、釉薬も灰釉の単調なものだが、庄内地方を中心に、秋田南部から新潟北部に至る広い地域に供給された実用陶器である。

このように、武家社会の安定をみる17世紀には東北地方各地での陶業が成立し、各藩の御用窯から次第に地方窯へと分化が進み、18世紀後半にはほぼ一斉に東北民窯が開花する時代を迎える。特に仙台藩領では大甕の需要と供給地が北上川流域に重なり、堤焼系統の海鼠釉を掛け流した量感のある甕が風靡繁殖されたのは堤焼の影響と北上山地の良質陶土の温床によるものである。

### 江戸後期における東北地方の陶窯

19世紀になると東北地方の各地に陶窯が築かれるようになり、福島では22ヶ所、山形では14ヶ所、宮城では14ヶ所、秋田では33ヶ所、岩手では27ヶ所、青森では5ヶ所、計155ヶ所の概数が数えられる。その中でも藩の殖産窯として強い影響力をおよぼしたのは、会津本郷（会津）・相馬大堀（相馬中村）・堤（仙台）・切込（仙台）・鍛冶町（盛岡）・津軽（弘前）などであった。特に相馬焼の技法は各地に伝導され、米沢成島（米沢）・白岩（秋田）・小久慈（八戸）・笠間（笠間）・益子（黒羽）・小杉（富山）等、各地の地窯創業に深く関わっている。

#### 会津本郷

17世紀の創業以来、今日まで300年以上も陶器の製造が続けられているが、19世紀初頭より磁器（新製瀬戸）の生産が開始されたことにより陶窯の数は減少した。

粗物とよばれていた会津本郷の陶器には、壺・蓋付壺・

徳利・甕・切立・片口・鉢・鯉鉢・皿などの形態があり、釉薬には糖白釉・鉄釉・青釉・海鼠釉などの流し掛けが多くみられる。

## 相馬駒焼と相馬大堀焼

17世紀中頃に田代清治右衛門が創業した相馬駒焼は、藩主の御用窯とされ、製品は全て藩に納入される御留焼となった。したがって、明治以前には一般庶民とは無縁の存在であり、その器種も茶陶を中心とした茶碗・水指・花生などが多かったらしい。文様としては、鉄釉を用いた走り駒だけが描かれ、青ひび釉が特徴的である。

一方の相馬大堀焼は17世紀末に民窯として創始され、長期にわたり民衆のための陶器として生産され続けてきた。18世紀初頭には大堀・井手・小野田の3村に瀬戸家の数が106戸を数え、18世紀末から19世紀にかけては、小丸・酒井などの10余箇村に百数十基の窯が煙を上げていたという。

大堀焼の原料には、浪江の美森山から採取した良質の粘土が用いられ、土瓶・壺・油壺・皿・片口・土鍋・播鉢・仏花器・甕など日用雑器が作られた。釉薬には、灰釉、糖白釉、飴釉、黒釉が多く用いられ、施文法としては流掛・飛鉋・筒描・釘彫・鏤絵・型抜などの技法がみられる。東北地方の他の民窯に比べて、大堀焼は薄手精巧なロクロ挽と地味ではあるが、見事な文様に大きな特色があるといえる。

## 堤焼

文政5年(1822)に堤焼乾馬窯の初代乾馬が書き残した『堤町陶土の由来』によれば、堤焼は江戸の陶器師、上村万右衛門によって創始されたというので、会津や相馬の系統とは離れている。堤焼と呼ばれるようになったのは明治以後のことらしく、それ以前には堤町に近い「杉山台の原」の地名をとって杉山焼と称されていた。堤焼の製品としてよく知られているものには、海鼠釉の甕があり、仙台付近の家々では水甕として久しく用いられ、あるいは甕棺として墓地に埋められたことも多かったようである。大甕・無頸壺・細口壺・爛徳利・油壺・切立・浅鉢・深鉢・仏花器・大鉢・播鉢・片口・箸立・杓立・燈火器・水滴・湯呑・抹茶茶碗・花生・根竹形花筒・狛犬・御堂・焙烙・大砲の弾丸など、伝世する堤焼は多種多様であるが、小皿や土瓶の類はほとんど姿をみない。胎土は堤町周辺から得たものを使用し、粗く赤味を帯びていて、無釉の底は赤煉瓦のような質感が特徴。しかし、水滴・杓立・花生・人形などの器種には綿密な胎土が用いられており、無釉の部分は黒褐色によく焼き締まっている。

## 白岩焼

相馬大堀焼の関係者であった相馬浪人、運七は藩の仕事のかたわら仙北郡心礎村で窯を築き開窯を志すが諸種の事

情により成功せず、適地を求めるうちに角館の東、白岩の地に良質の陶土を発見し、明和8年(1771)に窯を築いた。これが白岩瀬戸山である。翌年から安永4年(1775)まで陶器の焼き出しに努め、角館に仕える武士の中で運七を取り立てる人々が現れたことから、秋田藩最初の開窯が実現。白岩の住人の中から弟子たちも集まり、特に一番弟子であった山手儀三郎は瀬戸山の窯主を継承し、陶業を軌道に乗せた。その後、天明6年(1786)に儀三郎は京都へ上って京焼や楽焼の技法を学び、白岩焼発展の基礎を構築している。したがって、白岩の陶器は相馬焼の技術の上に、京焼や楽焼の知識が加味されたものといえる。

白岩焼の最盛期は、上窯の創設から8年目、天明5年(1785)に下窯(口窯)が築かれて以後のことであった。この頃は、年平均8回、9年間に71回の窯揚を行ったという記録がある。その後、嘉永5年から安政2年(1852～55)の間に「ハ窯」、同年には「ニ窯」、同4年にはさらに「ホ窯」、文久年間(1861～63)には「ヘ窯」も築かれて合計6窯となった。

白岩焼の製品には甕・蓋付甕・壺・お歯黒壺・鉢・播鉢・高坏・ランビキ・皿・おろし皿・湯呑・香炉・土瓶・油壺・箸立・片口・硯・水指・千体仏・人形など多種多様なものがある。施釉は鉄釉地に白濁釉の流掛による典型的なものから、海鼠釉や青釉も盛んに用いられた。それらの製品は既に相馬の伝統からは脱却して、秋田の風土の中で培われた独自の風格を備えている。

## その他の陶窯

相馬地方では藩の家老、岡田監物の家臣たちが副業で江戸中期頃から焼いた館ノ下焼が著名で、海鼠釉を流した大ぶりの水甕をはじめ、鉢・片口などの日用雑器が生産されていた。

また、相馬焼の系統を引く窯として米沢成島焼がある。米沢藩は窯業の育成に力を入れ、甕・鉢・壺・土瓶・播鉢・仏花器・切立・茶碗などが盛んに焼かれていた。文様を施さず、鉄釉地に海鼠釉を流掛にする手法は仙台の堤焼に通じるものがある。

秋田地方には白岩焼のほかに、19世紀中頃の開窯といわれる楯岡焼が知られている。

仙台地方では玉造郡岩出山の土野目焼と柴田郡村田の塩内焼に特色がみられる。土野目焼は、大堀焼とほとんど区別できないほどよく似た薄手の陶器を主とし、甕の形状も館ノ下のものに近い口辺をもつ。塩内焼は荒々しい雰囲気の出立に特色があり、東北地方としては異色の存在である。

西磐井郡の長島焼は嘉永4年(1851)頃の創業が推定されており、東北地方の生活に即した厚手で重厚な甕・壺・片口・火消壺・茶碗・焙烙その他の日用雑器が製作された。これらは堤焼や米沢成島焼などと同様に文様をほとんどもたず、鉄釉・糖白釉・海鼠釉を流掛にして変化を与える陶



器本来の製法を固守してきた。

盛岡・八戸地方では花巻の鍛冶町焼と久慈の小久慈焼が知られており、ともに19世紀初頭から中頃にかけての開窯である。鍛冶町焼は文政年間(1818～29)に古館伊織が創業し、後に盛岡藩の御用窯となっている。器種も甕・壺・播鉢・皿・花生・徳利が多く、仕上がりも薄手精巧で、相馬の影響が強くみられるという。小久慈焼は文化年中(1804～17)に同地の農民、甚右衛門が相馬でその技法を学び帰郷後に創業。以後は農事のかたわら、九戸郡、二戸郡および八戸周辺の需要に応じ、製品を供給したという。

津軽地方では弘前藩主が江戸の陶器師、久兵衛らを招聘し、寺町と清水村に窯を築いたのが端緒。窯場の場所からそれぞれ、平清水焼、大沢焼、下川原焼、悪戸焼と称した。これらを総称して津軽焼と呼ばれ、日用雑器が焼かれていたが、9代藩主、津軽寧親が発案したとされる玩具、下川原焼の鳩笛などが最も知られている。

## 宮城県の陶窯

### 小蓋焼

登米市東和町米川

旧窯主家には享保年間(1716～35)、伊達吉村巡視の際に自家製の陶器を献上して称賛を受けたとの伝えが残る。生業は染物業により家紋御免の家柄であったという。

陶土は日形付近からも駄送したともいわれ、製品は甕・徳利・切立・飯茶碗。釉薬は堤焼のような海鼠釉の流掛だったという。

### 山ノ神焼

登米市迫町

詳細不明。渡辺兼吉なる人が文化年間(1804～17)に開窯し、大正10年(1921)頃まで続いたとされる。

### 宮床焼

大和町宮床

天保年間(1830～43)に創始された磁器窯で、天保卯年銘の皿が残る。盛岡藩の藩窯、山蔭焼に後続する花古焼に久太郎という宮床の陶工がいた。

### 中田小島焼

登米市中田町

蛭名庄八が上方で製陶を学び開窯、以後は明治初年の廃業まで8代続いた。徳利に布袋の貼付文が特徴で、厚手に鉄釉のみ、地味な釉まる掛で流しがない。

### 上野目焼

大崎市岩出山町

相馬系の巧みな技法で、飛鉋徳利・土瓶等に優品がある。文政6年(1823)銘の大壺が残る。



堤 手焙烙 明治時代(19世紀末) 口径19.3cm

低温で焼かれた素焼きの土器で、底が平坦で縁が浅い。茶葉・塩・米・豆・銀杏・胡麻などを煎ったり蒸したりするのに用いる。

### 大明神焼

登米市東和町米川

詳細不明。「かわらけや」と称する屋敷地で操業され、明治30年(1897)頃の廃業という。

### 中野焼

栗原市栗駒

栗駒中野に瓦焼場という名称が残る。瓦も焼いたが、丸皿・角皿・急須なども焼かれ、磁器生産も行われたという。

### 西原焼

登米市東和町米川

瀬峰町菅原家が明治20年(1887)から10年間操業し、築館郡役場等の瓦を焼き、合間に甕も焼いたという。

### 姫松焼

栗原市一迫

一迫町王沢の菅原家が窯元となり、堤から職人を招き経営した。明治初年からはじめ隆盛したが、大正14年(1925)に廃業。

### 通揚焼

大崎市古川

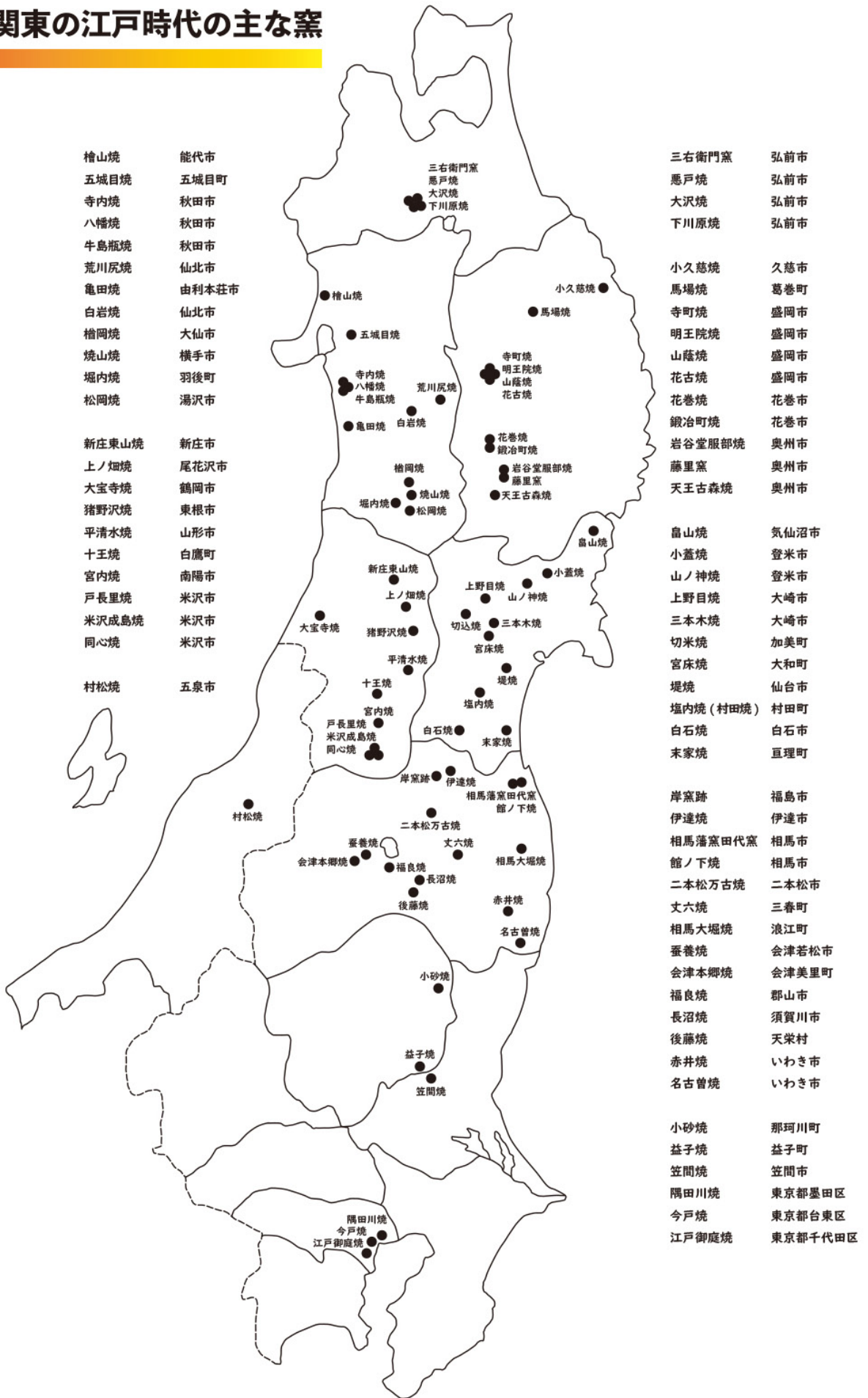
「せとや」と称された千葉家が窯元となり、3基の窯に10人ほどの職人がいた。千葉総之助が明治15年(1882)頃に創業。大正10年(1921)頃に廃窯となった。

### 神取御殿山焼

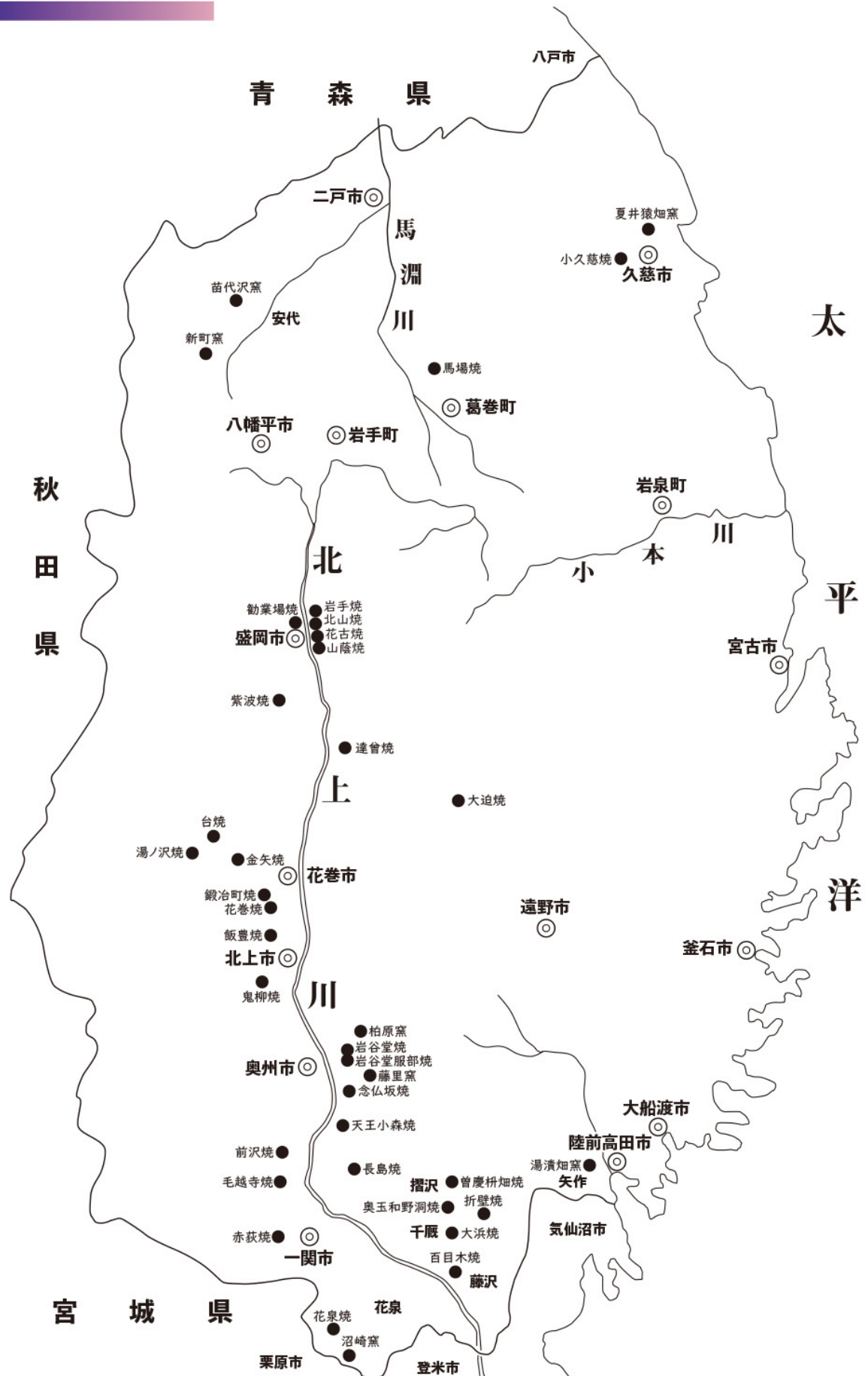
登米市津山町

嘉永6年(1853)、仙台住人の安部昌吉が佐々城朴安の邸宅に築窯し、同年11月に最初の千個を焼いたという記録がある。採算がとれないので安政2年(1855)に廃業した。

# 東北・関東の江戸時代の主な窯



# 岩手県内の主要な窯





## 岩手県南部の陶窯

### 赤萩焼

一関市山目町赤萩

宮田焼とも称され、同村の肝入、阿部幸右衛門が文化8年(1825)、京より及川吉三郎という陶工を招き郷村の殖産をはかったとされる。もしくは仙台堤焼の技法を習得して創始したともいわれている。その頃の作品として宮田大明神灯籠の脚部に弘化4年(1847)の銘が刻まれており、雇人には萩荘幸右衛門(のちの山目村長)や嘉永4年(1851)に『楽陶秘薬伝書』を記した辻村宗兵衛、佐々木幸栄もいた。また、佐藤繁治は修行ののち、生家の金成で新田焼を創業したという。

日用雑器が主体ではあるが、甕・壺・鉢類に趣があり、明治期までは本式の陶器で広く知られていたが、その後は素焼ものだけを焼くようになったという。大正10年(1921)頃まで続いたが廃窯となった。

### 折壁焼

一関市室根町折壁

大東洪民の芦家より婿となった小山文三郎が江戸末期に楽焼を修行。帰郷後の明治初期に折壁中間屋に開窯した。菓子皿や茶道具を中心に焼き、「陶山」「大日本」「楽」などの陶印が押された。

### 大浜焼

一関市千厩町小梨

「かわらば」と称された屋敷地付近に窯場があり、主に瓦を焼き花生等も製作されたという。

### 奥玉和野洞焼

一関市千厩町奥玉

奥玉船丸の吉田家の屋敷名「和野洞」から名づけられたという。播鉢が主体だが、大甕も製作されのちに瓦も焼いた。

### 花泉焼

一関市花泉町金尾

明治35年(1902)、福島県会津若松の千葉貞次が開窯し、短期間であるが日用の粗陶器を製造した。

### 沼崎窯

一関市花泉町涌津

詳細不明。

### 百目木焼

一関市藤沢町百目木

詳細不明だが遺作が確認されているらしい。

### 湯漬畑窯

陸前高田市矢作

詳細不明。

### 長島焼

平泉町長島

東稲山の南麓、瀬戸屋と呼ばれた地内で登窯を操業した。旧窯元家に残された嘉永4年(1851)の文書に窯の創始に係る経過が記されており、明治3年(1870)まで稼働して

いた。築窯には堤焼・赤萩焼・鍛冶町焼の職人が援助したという。

製品は東磐井郡、江刺郡、胆沢郡、和賀郡等に供給されていた。特に水甕は厚手重厚で、柿釉に口縁部までにおよぶ海鼠釉の流掛が特徴的である。

### 毛越寺焼

平泉町毛越

毛越寺門前において操業した小窯。日用雑器の陶器で操業期間も短く、遺作は極めて少ない。

### 鬼柳焼

北上市鬼柳

楽の型もの、手びねりの兩種がある。岩谷堂焼と同系統でほぼ同様の器種がつくられた。正重寺で操業の折、二人あった弟子のうちの一人が鬼柳で開窯したという伝えもあるが、鬼柳正覚寺所蔵の床置、「狸」の刻銘に「明治十八歳初冬 正覚寺応需 京都陶工 雲林院伊左阿弥造(楽印)」とあることから、岩谷堂と同一人物だったと考えられる。製品は岩谷堂同様に飴釉だが、鬼柳製は青味が強く発色している。

### 飯豊焼

北上市飯豊

明治5年(1872)、齋藤専太郎が窯元となって、尾張瀬戸から陶工、高橋友之助を招聘したのにはじまる。この友之助を師匠として、専太郎が自分の子や親類縁者に手伝わせて技法を習得させた。製陶は明治6年からはじまり大正8年(1919)頃まで続いている。

窯は平坦地に造られた登窯で、陶土は地元飯豊地内および花巻十二丁目の実相寺付近、釉薬は花巻湯口松倉山などから求めたといわれる。製品は大小の甕類・皿・茶碗・徳利・鉢類・壺類・播鉢にいたる日用雑器。なお、友之助は明治7年開窯の盛岡勸業場焼にも招かれ、技術指導を行っている。

### 鍛冶町焼

花巻市藤沢町

文政年間(1818～29)に古館伊織が稗貫郡万丁目村四本杉の陶土を用いて藤沢に築窯開業したもので、のちに盛岡藩御用陶工として主に日用諸雑器を造った。

明治になり禄を離れ、分家とともに陶業に励んだが、明治末期に本家が廃業、残る分家も戦時中に廃業した。現在の鍛冶町焼は戦後に阿部勝義氏とその陶法の保存再興を志し、各地の窯元の遍歴を経て陶技を習得して帰郷後に開窯したものである。

### 金矢焼

花巻市湯本金矢

明治前期、飯豊焼の高橋友之助の娘タケは、金矢の小田島作右衛門に嫁ぎ、この縁によって作右衛門が窯元となって友之助について登窯を築き、前後13年ほど焼いたという。

製品は日用雑器のほか玩具まで焼いたとされるが遺作は

少ない。陶土は小田島周助の所有地、金矢山から採取したものを使用した。

## 湯ノ沢焼 花巻市湯本台

窯元の小瀬川清志の名をとって小瀬川焼の別称もある。窯場は台温泉の入口で、明治6年(1917)頃、仙台の陶工、山下十七蔵が訪れ小瀬川家に止宿。かつて盛岡山陰焼の陶土を得た台山の土を知り、小瀬川氏を説いて窯元とし、製陶に従事したという。製品は半磁器に近く、器種は日用雑器であった。

## 台焼 花巻市湯本台(1期)・花巻温泉地内(2期)

花巻宮野目の勘兵衛が湯本狼沢の杉村家に入婿して分家となり、明治28年(1895)に開窯したとされる。同43年(1910)には岐阜の陶工、川上準蔵とともに会社組織にしたが間もなく解散。大正元年(1912)に京都で上絵付を修行していた子の忠八と瀬戸で修行していた治太郎が帰郷して陶業を助け、花巻温泉が開発されたのに伴って温泉土産品として台焼の名が広く知られるようになった。以後は事業を組合化して発展させ、窯場を花巻温泉地内の県窯業試験場に付属させ今日に至っている。

台焼の陶土は台温泉万寿山・仏沢・金矢山などから採取。製品は初期のものは半磁器で、精製陶土ではなかったため、濁りを帯びた製品が多かったが、のち改良され白磁に高火度の製陶が可能となった。

## 大迫焼 花巻市大迫町内川目

稲荷神社の万延元年(1860)奉納額に瓦師、藤沢仁太郎と職人二十名の銘がある。江戸末期から明治初頭にかけて操業し磁器も焼いた。染付のものは仙台の切込焼と同類のもので、最初は土も職人も仙台から求めたとされるが、後年には湯本の台から陶土を求めたという。日用雑器が主体であるが、型起こしの小皿類で染付けたものもある。

## 達曾焼 紫波町彦部星山

日詰の東側、北上川を隔てた丘陵地に窯跡が所在。創業者は石川県能美郡出身の山田豊松で、明治20年(1887)に縁あって紫波郡矢巾町煙山の達曾勘次郎の婿養子となった。同年に分家して星山に移ると、能登瓦窯の製法による窯を築き、約20年間わたって製陶を行ったという。

## 奥州市の陶窯

### 天王古森焼 奥州市前沢生母天王

江戸末期頃、小久慈で作陶を学んだ後藤兵蔵によって開窯されたが、製品の特長は長島焼に極めて類似するものがあるという。器種は甕類が多く、鉢類・片口・砂鉢・井・播鉢などの日用雑器。2基の登窯が確認されており、釉薬

土は窯付近の大洞沢から求めたとされる。

### 前沢焼 奥州市前沢町白鳥

仙台の早坂善作がかつて日本鉄道による東北本線の建設工事に従事したとき、この場所で良質な陶土を発見。それを機に明治33年(1900)に築窯したといわれる。水甕・播鉢のほか土管なども製造したという。

### 念仏坂焼 奥州市水沢黒石

創始年代は明らかではないが、昭和15年(1940)頃に窯跡が発見され、地権者の先祖が江戸末期に諸方を廻る飴の行商を生業としていた関係で、どこかで陶技を身につけて帰郷後に窯を築いたものと記録されている。操業は極めて短期間であつたらしく遺作は少ない。器種は日用雑器が中心で、水甕から鉢類・茶碗にいたるまでを手掛けている。陶土は付近に良質なものがあり、戦後は長根において煉瓦が焼かれていたこともあった。

### 藤里窯 奥州市江刺藤里

詳細不明。藤里梁場に瀬戸屋と称される場所があり、付近に陶窯があつたという。また、上長沢でも瓦が焼かれていたとされる。付近からは良質な陶土が産出する。

### 柏原窯 奥州市江刺稲瀬

詳細不明。稲瀬柏原地内より甕・鉢・碗などの素焼片やハマ・ツクなどの窯道具が表採されている。また、付近には古代窯の瀬谷子窯跡群が所在し、良質な陶土を産出することでも知られている。

### 岩谷堂服部焼 奥州市江刺南町

文政12年(1829)銘の水甕が現存しており、江戸後期に操業していたとみられる。また、窯跡付近からは徳利・花生・播鉢・植木鉢などの陶片や瓦片が表採されている。服部は岩谷堂の南町にある地名で、人首川に臨んだ斜面に窯場が設けられ「瀬戸場」と称されていたという。製品は日用雑器が主体だが、瓦も焼かれていたようである。

### 岩谷堂焼 奥州市江刺岩谷堂根岸

明治14年(1881)頃、京都出身の雲林院伊左阿弥が盛岡勧業場焼で就業後、岩谷堂片岡の正重寺住職の世話で焼き出したもの。また、鬼柳にも小窯を設けているが、同系につき一般に岩谷堂焼と総称される。

製品は手びねりと型物があり、各種の器種が焼かれ、器の底部または腰の部分に、丸に「楽」の印款がある。昭和初期まで約50年にわたって操業した。



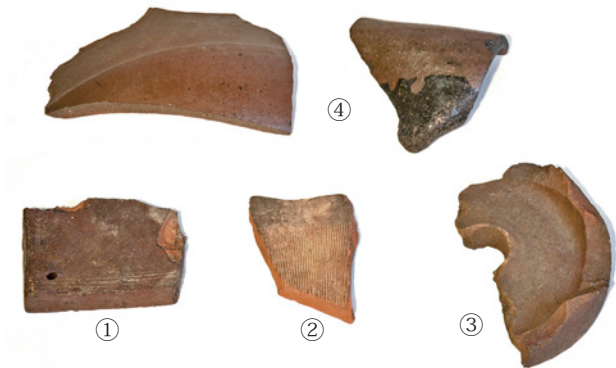
(底部銘)  
岩谷堂  
服部焼  
文政十二年作

江戸後期に操業したとみられ、窯跡付近からは陶片や瓦片が僅かに表採されているが、現存品は本品のみが唯一伝えられる。

服部は岩谷堂の南町にある地名で、人首川に臨んだ斜面に窯場が設けられ「瀬戸場」と称されていたという。



岩谷堂服部 水甕 銘 岩谷堂服部焼 文政十二年作  
文政 12 年 (1829) 口径 55.5cm 器高 61.0cm 底径 18.0cm



岩谷堂服部 陶片 江戸時代 (19 世紀)  
① 瓦 ② 播鉢 ③ 窯道具 (ハマ) ④ 甕



岩谷堂服部 花生  
江戸時代 (19 世紀) 口径 6.0cm 器高 15.0cm  
窯跡付近から表採された未製品。



① 柏原 窯道具 ハマ  
焼成時、製品が床に張り付かないように敷く焼台。  
② 柏原 窯道具 ツク  
焼成室に製品を乗せる棚板を設置するための支柱。



柏原窯 年代不詳 ① 碗 ② 鉢 ③ 甕 ④ 瓦  
稲瀬柏原地内より素焼片や窯道具が表採されているが詳細不明。付近には古代窯である瀬谷子窯跡群が所在し、良質な陶土が産出する。





岩谷堂 楽 壺々

明治時代(19世紀末) 口径2.5cm 器高2.2cm

茶懐石に使う赤楽の器。なますなどを入れ懐石膳の右上角に添える。



岩谷堂 楽 燈明皿

明治時代(19世紀末) 口径5.5cm



岩谷堂 楽 切立小付葉形皿

明治時代(19世紀末) 口径7.7×13.5cm 切立口径4.0cm



岩谷堂 楽 巻葉貼付文蓮葉形可杯

明治時代(19世紀末) 口径12.0cm 器高5.0cm

可杯

杯の一種。器の底に小さな穴がうがってあり、杯を持つ手の指でその穴を塞ぎ、飲み干さなければ下に置くことができない座興杯。



岩谷堂 楽 明治時代(19世紀末)

① 海藻貼付文鮑形可杯 口径12×13cm 器高4.5cm

② 帆立貼付文可杯 口径11.5cm 器高4.7cm

③ 大黒貼付文可杯 口径12.5cm 器高4.7cm



岩谷堂 楽 多彩釉葛葉貼付文鮑形可杯

明治時代(19世紀末) 口径12.6×14.7 器高5.1cm



岩谷堂 楽 葉形銘々皿  
明治時代(19世紀末) 器径 10.5 × 16.3cm



岩谷堂 楽 蓋向付  
明治18年(1885) 碗口径12.0cm 器高6.5cm

懐石料理において、折敷の奥側に配膳される「向付」と呼ばれる器のうち、蓋付きのものをいう。主に煮物や蒸し物などの温かい料理を入れるために用いられる。



岩谷堂 楽 蓮葉形耳付鉢  
銘 禅道以寄進ス 意左阿弥  
明治時代(19世紀末) 口径16.3cm 器高7.0cm



岩谷堂 楽 亀貼付文杯洗  
明治時代(19世紀末) 口径15.0cm 器高7.0cm  
酒席で杯を交わす際に、杯を洗いすすぐための器。



岩谷堂 楽 葡萄貼付文松毬脚付杯洗  
明治時代(19世紀末) 口径16.8cm 器高8.5cm





岩谷堂 楽 梅花貼付文輪花皿  
明治時代(19世紀末) 口径 16.8cm



岩谷堂 楽 梅花貼付文鉢  
明治時代(19世紀末) 口径 13.6cm 器高 3.8cm



岩谷堂 楽 鮑形鉢  
明治時代(19世紀末) 口径 16.5cm 器高 5.5cm



岩谷堂 楽 葡萄貼付文双耳花生  
明治 18 年(1885) 口径 10.8cm 器高 22.3cm



岩谷堂 楽 梅花山水図貼付文花器  
明治時代(19世紀末) 口径 10.7cm 器高 21.0cm



岩谷堂 楽 桃形水注  
 明治時代(19世紀末) 器高 14.0cm 底径 10.0cm



岩谷堂 楽 蓮葉蛙摘水注  
 明治時代(19世紀末) 器高 17.0cm 底径 8.5cm



岩谷堂 楽 龍文松毬摘土瓶  
 明治時代(19世紀末) 器高 17.0cm 底径 12.0cm



岩谷堂 楽 水注  
 明治時代(19世紀末) 器高 17.5cm 底径 10.5cm



岩谷堂 楽 笹葉貼付文竹根形水注  
 明治時代(19世紀末) 器高 12.5cm 底径 11.5cm



岩谷堂 楽 靈芝摘水注  
 銘 良寛幸應 伊左阿弥  
 明治時代(19世紀末) 器高 22.0cm 底径 7.5cm

### 水注

茶道、煎茶道などで使用される水を注ぎ足すための容器。水屋から持ち出し、水指に水を注ぎ足すのが主な役割である。



岩谷堂 楽 獅子香炉

明治時代(19世紀末) 器高 13.0cm

口を一文字に結んだ吽形の像容であることから、もとは一対であった可能性も考えられる。



(銘)  
明治廿五年  
五月四日  
甲子日造



岩谷堂 楽 恵比寿大黒

銘 明治廿五年 五月四日 甲子日造

明治 25 年 (1892) 器高 恵比須 15.5cm 大黒 15.0cm



岩谷堂 楽 福祿寿

明治 18 年 (1885) 器高 24.8cm





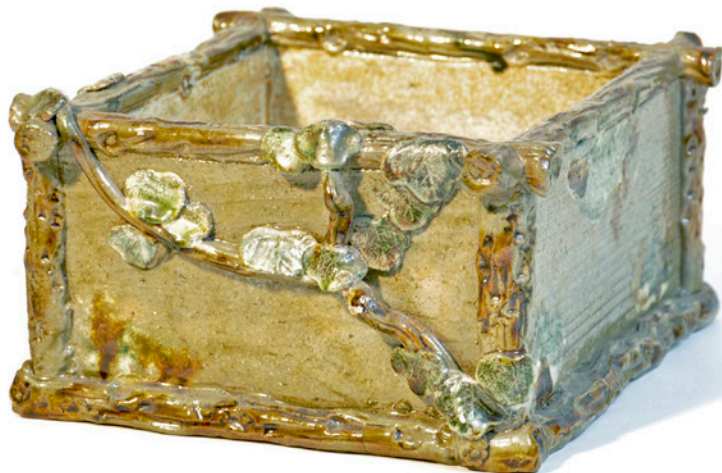
岩谷堂 楽 煎茶器  
明治時代(19世紀末) 口径 11.0cm 器高 6.0cm



岩谷堂 楽 瓢箪形水滴  
明治時代(19世紀末) 切立径 6.0cm 器高 4.0cm  
墨をするために水を蓄え硯に注ぐ容器。風穴と水穴の小孔があり、一滴ずつ少量の水を注ぐことができる。



岩谷堂 楽 枝葉貼付文櫛形鉢  
明治時代(19世紀末) 口径 14.3cm 器高 8.5cm



岩谷堂 楽 枝葉貼付文櫛形鉢  
明治時代(19世紀末) 口径 14.3cm 器高 8.5cm



岩谷堂 楽 多彩釉梅花貼付文壺  
明治時代(19世紀末) 口径5.9cm 器高11cm



岩谷堂 楽 柿形蓋物  
明治時代(19世紀末) 器高10.5 底径7.5cm



岩谷堂 楽 根株形蓋置  
明治時代(19世紀末) 器径5.3cm 器高5.0cm  
茶釜の蓋や柄杓の合を乗せるための茶道具。



岩谷堂 楽 葡萄貼付文水指  
明治時代(19世紀末) 口径12.4cm 器高14.4cm  
茶道の点前で、茶釜に水を足したり、茶碗や茶筌を洗う水を蓄えておくための器。





岩谷堂 楽 蓋型

明治時代 (19世紀末) 器径 31.7cm



岩谷堂 楽 蘭引

明治時代 (19世紀末)

薬油や酒類などを蒸留するための器具。3段重ねの装置からなり、本品は中段部の装置。冷却された精油成分を回収するための樋が付いている。



鬼柳 楽 鯛形皿

明治時代 (19世紀末) 器径 17.5 × 25.5cm

#### 鬼柳焼

岩谷堂楽と同系統で型物・手びねりの両種ともほぼ同様の器種がつくられた。施釉も岩谷堂と同じく飴釉が主体だが、鬼柳製は青味が強く発色するのが特徴。



鬼柳 楽 葉形銘々皿

明治時代 (19世紀末) 器径 10.5 × 16.3cm

## 楽焼の系譜と岩谷堂焼

楽焼は手びねりによる造形で火度の低い軟陶の焼きものとして知られる。

安土桃山時代に帰化人、阿米夜(飴也・飴屋)が創始したとされ、楽焼という名称は初代長次郎が豊臣秀吉の聚楽第内で製陶したことによる。初めは聚楽焼と呼ばれ、二代常慶が「楽」字の印款を賜り、これを使用するにおよんで順次、楽焼の名で呼ばれるようになったという。

製品は茶碗を主とし、他に茶入・香炉・水指・香合などがある。

茶碗には赤楽と黒楽があり、初期の赤楽の胎土は聚楽土による発色で、黒楽は賀茂川上流の真黒石とう釉料による発色である。また、香炉釉という白釉などもあるが用例は少ない。

楽焼は日本で茶道が盛行し、これに要求されて出現した独自の産物でもあるので、その特徴は全て抹茶道の精神に合致したものである。茶の温味を保つのに適した器質、形態の安定感と不規則自在な成形、口造りの巧みさ、色相の沈着なども手づくねのみがもつ温雅静寂の趣をもっている。したがって、初代長次郎は千利休の指導によって日本独自の茶碗を創製したのであろうともいわれている。

楽焼は京都の楽家が代々その本流を伝えるものであり、「楽焼家元」によって本窯の技法が継承されている。その一方で、楽家の一族ないし弟子の作を脇窯という。和泉国堺に移って開窯した二代常慶の兄宗味、左文字の楽印を用いた三代道入の弟道楽、四代一入の弟一元の開創になる玉水楽などは、楽家直接の脇窯であり、加賀金沢の大樋焼は地方的脇窯である。このほか楽焼系統の焼物は全国各地にみられ枚挙にいとまがない。それは製法が比較的容易であるため、各地の窯場または好事家らによって盛んに製陶・伝播されたことに起因する。また、元文元年(1736)には大阪の田中潜竜子によって簡易な楽焼焼成法を説いた『楽焼秘囊』が刊行されるなど楽焼の技法はかなり流布され、ある程度は自由に楽ブランドを作為できたようである。楽焼はロクロを用いず手づくねで作られるのが基本で、屋内の内窯で焼く。素朴な窯土を僅かに用いた黒楽は窯に一碗、1,200度に高温で上げ、黒石を材料とした釉を溶かす。赤楽は三碗ほど入れ鉛を加え、1,000度以下で焼き上げる。楽本窯の技法が一子相伝とされているように、楽焼は量産を目指す日用雑器を焼く大窯とは異なり、作業に携わる職人数は格段に少ない。

この地方でも東磐井渋民の名家、芦家から折壁の肝入、小山家に入婿した小山文三郎が江戸末期に楽焼の技法を学び、明治初期に楽印銘を使用した折壁焼を開窯。また、江刺岩谷堂でも正重寺の住職の世話で、雲林院伊左阿弥が明治14年(1881)頃から楽焼を焼き出し、鬼柳にも小窯を築いている。

雲林院伊左阿弥という人物について詳細は不明だが、明治7年(1874)、県令の島惟精が県下に産業を奨励するため、県営の勸業試験場を設けて技術・経営者の養成を行った勸業場焼で就業後、岩谷堂に居住したとされている。遺作は赤楽風の素地に、草木果実・生物類の貼り付け模様が特徴的で、施釉は蜜柑色の飴釉が主体。この時代の雅趣に富んだ造形で、楽印銘は3種がみられる。



楽家印譜



岩谷堂焼銘



岩谷堂焼印銘



## 明治初期の勸業窯—勸業場焼—

明治7年(1874)、県令島惟精は、県下に産業を奨励するため、県営の勸業試験場(明治9年に勸業場と改称)を設け、技術・経営指導・技能者養成を行った。この試験場には当初から陶器部門が開設されていた。

県は尾張の瀬戸から陶工2人を招いて盛岡内丸に窯を築いたのが勸業場焼の始まりである。やがて、地元の職人として盛岡の北山窯で働いた萩原重太郎、和賀飯豊の高橋友之助など県内各地の陶工を参加させ、さらに会津本郷からも採用している。こうして勸業場焼は明治13年(1880)、施設を民間に貸与するまで続いたが、その間に3回ほど移転している。したがって、窯場が違うため勸業場焼はその製造の時期を第1～3期に分けることができる。しかし、当時としては近代的な窯業の先進設備で運営された勸業場焼も民間の時代を加えても僅か十数年の経営に過ぎず、陶土や釉薬などの原料は県内各地のほか輸入品や化学釉薬なども使用された。なお、絵付けは染付・色絵・無地ものなどのほか、型紙摺・型紙の吹墨、転写技法など近代陶製の様々な技法が学べたという。

### ● 染付

素焼に顔料で絵を描く→その上に透明な釉薬をかけて本焼する。

### ● 型紙摺

素焼の上に型紙を置く→刷毛で顔料を摺り込む→透明な釉薬を掛けて本焼する。

### ● 型紙吹墨

素焼の上に型紙を置く→顔料を吹き付ける→線描きをする→釉薬を掛けて本焼する。

製品は瀬戸などの先進地の陶工が作ったものだけに形・焼き・絵付などの点で優れたものが多かったが、窯場としての特徴は個性に乏しかった。また、民営時代の詳細も不明である。

こうしたことで、勸業場焼の遺品からは明確な内容分析はできないが、窯場から出土した資料でその一部を知る程度である。この窯の製品には必ず「巖手製」「巖手造」「岩手造」の銘が入っている。

### ◆ 第1期

瀬戸から2人の陶工を招いて内丸(藩政時代の御蔵があった場所)で開窯。原料陶土は山蔭焼などに使った花巻湯本の万寿山・鬼ガ沢(台温泉地内)・湯口の松倉山、紫波郡矢巾の南昌山などから採っている。製品は磁器で、純白ではないものの高温で焼いてある。絵付は呉須の染付が多く、日用雑器が主体。

### ◆ 第2期

前に築いた窯場一帯は内丸公園地(現在の県民会館の場所)として整備されたため、窯は同じ内丸にあった「本御蔵」跡地に移転した。ここには盛岡城外濠の土塁が残っていたので、その傾斜地を利用して窯を築き、本御蔵の建物を作業場にした。第2期に入ってからのはじめは順調で、研修生の技量も上がり、特に腕が優れた者数人のほかに会津本郷から陶絵師1人を採用している。明治9年(1876)、国の勸業試験場から石膏型の使用や絵付用に欧州産コバルトを採用することなどの提言を受けている。

### ◆ 第3期

明治12年(1879)、窯場は勸業場内22号館(現盛岡城跡公園)に移転。陶製部門の業績も軌道に乗ったので、他の部門と同様、民営に移すこととなり、勸業場窯は瓦窯とともに盛岡の実業家、宮田謙次郎が年間10円の貸与料と研修生10人以上を養成する条件で経営にあたった。貸与期間は明治14年(1881)7月から満3カ年だったとされるが、詳細は判然としない。

## 岩谷堂焼と雲林院伊左阿弥

岩谷堂焼は、雲林院伊左阿弥が盛岡勸業場焼で就業後に、岩谷堂片岡の正重寺の住職の世話で明治14年(1881)頃から焼き出した陶器である。また、楽焼であることから岩谷堂楽とも呼ばれ、その遺作の少なさにより往々にして「幻の焼きもの」とも称されている。

作品は手びねりおよび型物で、花生・土瓶・急須・坏類、各種の皿類が作られた。また、香炉や福祿寿・恵比須・大黒・仏像・羅漢像などもあり、薬油や酒類などを蒸留する蘭引も製造している。また、鬼柳村にも寄留し小窯を築いているが、作品は同系につき一般に岩谷堂焼と総称される。細やかな技法による種々の草木果実・生物類の貼り付け模様も多く、釉薬は飴釉で全般的に蜜柑色の色調。器の底部または腰の部分に楽印銘を施すのが特徴である。

雲林院伊左阿弥という人物についての実像は不明であるが、鬼柳正覚寺蔵の床置の「明治十八歳初冬 正覚寺応需 京都陶工 雲林院伊左阿弥造」の刻銘から、京都の出身者とみられている。また、盛岡勸業場焼で就業しているが、陶器部門の技術指導には瀬戸から招いた陶工、加藤常十、同善治の2名のほか、本県の職人として盛岡の北山窯の萩原重太郎、和賀飯豊窯の高橋友之助がいた。ところが、指導陣の顔ぶれに楽焼の陶工はおらず、伊左阿弥がここで如何にして楽焼の技法を学んだのかは判然としない。

一方で、盛岡藩政時代末期の陶窯の中には、盛岡城内で楽を焼いた御庭焼が存在した。御庭焼とは、趣味のある藩主が城内や邸宅に窯を設けて茶器などを製陶させたもので、紀州徳川家の偕楽園焼などがよく知られている。盛岡御庭焼の記録は少ないが、弘化2年(1845)に時の藩主、南部利剛が自らの趣向により京都の楽焼師、八十八という者を召抱えている。八十八の遺作は極めて少ないが、相当な技量であったことが知られ、嘉永2年(1849)には息子の勝治、その翌年には弟子の乙吉が跡職召抱えとなって製陶を継続している。その後、明治以降における御庭焼の系譜の消息は伝えられていないが、奇しくも盛岡城内に設けられた勧業場焼との接点も考えられなくもない。ともすれば、伊左阿弥は盛岡御庭焼の系統から楽焼の技法を習得した可能性も考えられる。

勧業場焼が軌道に乗った明治9年(1876)頃からは、特に技量の優れた研修生を陶工として本採用し、瀬戸陶工の両名が帰国。新たに会津本郷から陶絵師1名が採用されている。しかし、明治12年(1879)に民営化されると程なくして事業は廃止された。伊左阿弥が正重寺住職の後援により岩谷堂片岡の同寺に開窯したのが、明治14年頃なので、それに前後してのことであったと想像できるが、依然として伊左阿弥の実名や出自などの詳細は不明瞭のままである。

ところで、院号の「雲林院」は京都紫野にある臨済宗寺院として実在する。かつては天台宗の大寺院として知られ、『源氏物語』『今昔物語集』『大鏡』などに登場する古刹。在原業平が『伊勢物語』の筋を夢で語る謡曲『雲林院』の題材にもなり、世阿弥自筆による能本も現存する。鎌倉時代末期には大徳寺の塔頭として禅寺となったが、応仁の乱の兵火により廃絶。宝暦4年(1707)にかつての院号を冠し再建されて現在に至っている。もちろん、伊左阿弥が雲林院の親類縁者とは考えにくい、あるいは紫野周辺の出身だったのかもしれない。また、伊左阿弥の「阿弥号」は時宗の開祖、一遍の教えを信仰する信徒が授かる法名「阿弥陀仏号」の略称であるが、室町時代以降は時宗僧に限らず主に和歌、連歌、能楽などに通じる芸能者が冠称した。したがって、雲林院伊左阿弥陀という名乗りも、雅趣の追求を志したものといえるかもしれない。

在銘の遺作は少ないが、蓮葉形耳付鉢の底部に「禅道以寄進ス 意左阿弥」と読み取れるものがある。これは文字通り自らが正重寺に寄進した作品と思われる。また、湯瓶の一つに「良寛幸應 伊左阿弥」の記銘があり、これは正重寺の住職である導円良寛の求めに応じて製作したものとみられる。なお、同寺は明治13年(1880)の片岡の大火に類焼しており本堂を失っている。以後、野手崎村から建物を譲り受けて仮本堂を設けたが、本堂の再建に至ったのは昭和62年(1986)のことである。そうした苦難の状況下で良寛は伊左阿弥を招いて製陶を支援している。また、

良寛は園芸にも傾倒し、境内に桜50種、バラ50種、菖蒲50種をはじめ、沙羅双樹、ザクロ、イチイ、高野槇など多くの草木を植え、さながら植物園の様相を呈したという。伊左阿弥の作風に草花紋の装飾が多くみられるのは、良寛の趣向の影響も大きかったのかもしれない。

かくして、伊左阿弥陀は昭和初期まで約50年間にわたってこの地で製陶を続け、正重寺は「陶工のいる寺」として知られるようになったという。

## 【謝意】

本展の開催および本稿の執筆にあたっては、太田茂樹氏、藤沼邦彦氏、宮本升平氏、村上光一氏、山野英雄氏から多大なる資料のご提供および種々のご教示・ご助言を賜りました。記して深く感謝の意を表します。

## 引用・参考文献

- 盛岡市公民館『岩手の陶芸』1969年
- 加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』淡交社 1972年
- 芹沢長介他『日本やきもの集成』平凡社 1981年
- 東北陶磁文化館『東北の近世陶磁』1987年
- 岩手県文化財愛護協会『岩手の手仕事』1988年
- 吉田義昭『盛岡の陶磁文化誌一城下町盛岡の陶窯文化のあゆみ一』盛岡市教育委員会 2001年
- 村上光一『郷里の陶磁選Ⅰ一楽焼と小山文三郎伝一』2001年
- 村上光一『郷里の陶磁選Ⅱ一門崎妻神砂地屋敷小野寺家の唐津壺から一』2003年
- 村上光一『郷里の陶磁選Ⅲ一民窯首慶柳窯の大水甕から一』2006年

NO	窯場	名称	制作年代	寸法 (cm)	所蔵	備考
1～6	岩谷堂 楽	燈明皿	明治時代 (19世紀末)	口径 5.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
7～11	岩谷堂 楽	壺々	明治時代 (19世紀末)	口径 2.5 器高 2.2	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
12～18	岩谷堂 楽	切立小付葉形皿	明治時代 (19世紀末)	口径 7.7×13.5 切立口径 4.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
19	岩谷堂 楽	巻葉貼付文蓮葉形可杯	明治時代 (19世紀末)	口径 12.0 器高 5.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
20	岩谷堂 楽	海藻貼付文鮑形可杯	明治時代 (19世紀末)	口径 12.0×13.0 器高 4.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
21	岩谷堂 楽	多彩釉葛葉貼付文鮑形可杯	明治時代 (19世紀末)	口径 12.6×14.7 器高 5.1	個人蔵	
22	岩谷堂 楽	帆立貼付文可杯	明治時代 (19世紀末)	口径 11.5 器高 4.7	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
23	岩谷堂 楽	蟹貼付文可杯	明治時代 (19世紀末)	口径 11.5 器高 4.7	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
24	岩谷堂 楽	大黒貼付文可杯	明治時代 (19世紀末)	口径 12.5 器高 4.7	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
25	岩谷堂 楽	亀貼付文杯洗	明治時代 (19世紀末)	口径 15.0 器高 7.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
26～31	岩谷堂 楽	葉形銘々皿	明治時代 (19世紀末)	器径 10.5×16.3	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
32～43	岩谷堂 楽	蓋向付	明治 18 年 (1885)	椀口径 12.0 器高 6.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
44・45	岩谷堂 楽	椀	明治時代 (19世紀末)	口径 12.0 器高 6.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
46		共箱	明治 18 年 (1885)		個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	(表銘) 楽焼 茶碗十貳人前入 高橋氏 (裏銘) 明治十八年求之
47	岩谷堂 楽	蓮葉形耳付鉢	明治時代 (19世紀末)	口径 16.3 器高 7.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	銘 禅道以寄進ス 意左阿弥
48	岩谷堂 楽	葡萄貼付文松毬脚付杯洗	明治時代 (19世紀末)	口径 16.8 器高 8.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
49	岩谷堂 楽	葡萄貼付文双耳花生	明治 18 年 (1885)	口径 10.8 器高 22.3	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
50	岩谷堂 楽	梅花山水図貼付文花器	明治時代 (19世紀末)	口径 10.7 器高 21.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
51		共箱	明治 18 年 (1885)		個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	(表銘) 楽焼 床置并花瓶 高橋氏 (裏銘) 明治十八年求之
52	岩谷堂 楽	梅花貼付文輪花皿	明治時代 (19世紀末)	口径 16.8	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
53	岩谷堂 楽	梅花貼付文鉢	明治時代 (19世紀末)	口径 13.6 器高 3.8	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
54	岩谷堂 楽	鮑形鉢	明治時代 (19世紀末)	口径 16.5 器高 5.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	



NO	窯場	名称	制作年代	寸法 (cm)	所蔵	備考
55	岩谷堂 楽	桃形水注	明治時代 (19世紀末)	器高 14.0 底径 10.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
56	岩谷堂 楽	笹葉貼付文竹根形水注	明治時代 (19世紀末)	器高 12.5 底径 11.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
57	岩谷堂 楽	龍文松毬摘土瓶	明治時代 (19世紀末)	器高 17.0 底径 12.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
58	岩谷堂 楽	水注	明治時代 (19世紀末)	器高 17.5 底径 10.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
59	岩谷堂 楽	蓮葉蛙摘水注	明治時代 (19世紀末)	器高 17.0 底径 8.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
60	岩谷堂 楽	靈芝摘水注	明治時代 (19世紀末)	器高 22.0 底径 7.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	銘 良寛幸應 伊左阿弥
61	岩谷堂 服部	水甕	文政 12 年 (1829)	口径 55.5 器高 61.0 底径 18.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	銘 岩谷堂服部焼 文政十二年作
62	岩谷堂 服部	花生	江戸時代 (19世紀)	口径 6.0 器高 15.0	個人蔵	
63	岩谷堂 服部	搦鉢	江戸時代 (19世紀)		えさし郷土文化館	
64	岩谷堂 服部	窯道具 ハマ	江戸時代 (19世紀)		えさし郷土文化館	
65	岩谷堂 服部	瓦	江戸時代 (19世紀)		えさし郷土文化館	
66・ 67	岩谷堂 服部	甕	江戸時代 (19世紀)		えさし郷土文化館	
68	仙台 堤	手焙烙	明治時代 (19世紀末)	口径 19.3	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
69～ 71	稲瀬 柏原	甕	年代不詳		えさし郷土文化館	
72	稲瀬 柏原	鉢	年代不詳		えさし郷土文化館	
73・ 74	稲瀬 柏原	椀	年代不詳		えさし郷土文化館	
75・ 76	稲瀬 柏原	窯道具 ハマ	年代不詳		えさし郷土文化館	
77	稲瀬 柏原	窯道具 ツク	年代不詳		えさし郷土文化館	
78・ 79	稲瀬 柏原	瓦	年代不詳		えさし郷土文化館	
80・ 81	岩谷堂 楽	恵比寿大黒	明治 25 年 (1892)	器高 恵比寿 15.5 大黒 15.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	銘 明治廿五年五月四日 甲子日造
82・ 83	岩谷堂 楽	恵比寿大黒	明治時代 (19世紀末)	器高 恵比寿 15.5 大黒 15.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
84	岩谷堂 楽	福祿寿	明治 18 年 (1885)	器高 24.8	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
85	岩谷堂 楽	獅子香炉	明治時代 (19世紀末)	器高 13.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	

NO	窯場	名称	制作年代	寸法 (cm)	所蔵	備考
86	岩谷堂 楽	枝葉貼付文樹形鉢	明治時代 (19世紀末)	口径 14.3 器高 8.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
87	岩谷堂 楽	亀貼付文蓮葉形手付皿	明治時代 (19世紀末)	口径 18.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
88	岩谷堂 楽	煎茶器	明治時代 (19世紀末)	口径 11.0 器高 6.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
89	岩谷堂 楽	瓢箪形水滴	明治時代 (19世紀末)	切立径 6.0 器高 4.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
90	岩谷堂 楽	根株形蓋置	明治時代 (19世紀末)	器径 5.3 器高 5.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
91	岩谷堂 楽	葡萄貼付文水指	明治時代 (19世紀末)	口径 12.4 器高 14.4	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
92	岩谷堂 楽	柿形蓋物	明治時代 (19世紀末)	器高 10.5 底径 7.5	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
93	岩谷堂 楽	多彩釉梅花貼付文壺	明治時代 (19世紀末)	口径 5.9 器高 11.0	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
94	岩谷堂 楽	蘭引	明治時代 (19世紀末)		個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
95	岩谷堂 楽	蓋形	明治時代 (19世紀末)	器径 31.7	個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)	
96	鬼柳 楽	鯛形皿	明治時代 (19世紀末)	器径 17.5×25.5	個人蔵	
97	鬼柳 楽	葉形銘々皿	明治時代 (19世紀末)	器径 10.5×16.3	個人蔵	

図 録

# 岩谷堂焼

令和2年(2020年) 10月17日発行

編集発行 えさし郷土文化館

〒023-1101  
岩手県奥州市江刺岩谷堂字小名丸 102-1  
TEL 0197-31-1600  
<https://www.esashi-iwate.gr.jp/bunka/>

印 刷 えさし郷土文化館



**iWayado  
ware**